

国連難民高等弁務官として活躍した緒方貞子氏をイメージしたフェミニズムアート。女性の生き方をアートにすることの意義についても議論した



自らも障害がありながら、女子教育に力を入れたジュリー・ピリヤートに捧げるアートも



### 自らの「使命」を見出して 社会を導く女性を育てる

難民キャンプに並ぶテントを包む大きな手（緒方貞子）や、太陽を型取ったオブジェクトと並ぶ文芸誌の表紙（平塚らいてう）。ノートルダム清心学園清心女子高等学校（以下、清心女子高校）

の生徒たちが、授業の一環で歴史に残る女性をイメージして制作したフェミニズムアート作品だ。  
同校では、高校2年生の総合的な学習の時間の選択授業として、「女性」科目を設けている。1999年に選択制の発展科目として始めた「現代社会と女性」が原点で、大学とも連携し、毎年20人ほどが受講する伝統の授業だ。  
「私自身は共学で育ったこともあり、この学校で教えるようになるまで、ジェンダー教育については何も知らなかったのです」と話すのは、同校で人権教育課主任を務める丸王祐子先生だ。「2015年の持続可能な開発目標（SDGs）の中でもジェンダーの平等や女子教育の重要性が目標の一つに掲げられるなど、世界的にもジェンダー教育の理解が深まっていると感じます」

清心女子高校の母体となるナミュール・ノートルダム修道女会の創始者ジュリー・ピリヤートは、フランス革命後の19世紀初頭に、貧困層への教育を使命とする同修道女会を立ち上げた。特に力を

## 次世代を担う女性の使命

女性を取り巻く課題は何か、社会を変えていくにはどうすればいいか。岡山県のノートルダム清心学園清心女子高等学校では、自ら社会をリードできる女性となるため、生徒たちがさまざまな角度から女性について学び、発信している。

### 世界とつながる 教室

入れたのが、貧困層の女子への無償教育だ。その伝統を受け継ぐ清心女子高校では、キリスト教精神に基づき、社会の中で自分が果たせる役割を自覚し、勇気を持って実行する女性の育成を目指して独自の取り組みを行っている。「女性」科目の授業はその一環だ。

丸王先生は、かつてJICAの教師海外研修でラオスを訪問したことがある。今年はその経験を基に「女性と貧困」をテーマとした特別授業を行い、なぜ女性が貧困に陥りやすいのか、それが障害という属性と結び付くようになるか、などを議論した。

授業では毎年、「現代社会とジェンダー」「女性と仕事」「女性とメディア」などの多彩なテーマを取り上げているが、中でも生徒たちを大きく刺激し、反応を引き出しているテーマの一つが、ジェンダーの捉え方を考える高大連携授業だ。ノートルダム清心女子大学の山下美紀教授が協力しているこの授業では、「そもそも、性は男女の二つに切り分けられるほど単純なものではない」という視点から出発し、自分たちが普段当たり前だと思っていることを改めて考え直す内容となっている。

女性や障害者などに特有の課題は、身近に存在しているのに普段あまり意識する機会がなく、外からは見えづらい。生徒たちはワークシoppを通して新しい視点に気付いた様子で、「最初は本人に原因があるのではないか、我慢すれば良いのにと感じていましたが、社会の仕組みにこそ原因があるのだと気付くことができました」「善意の募金だけでは根本的な貧困の解決にはつながらないと分かりました。有償の商品やサービスを生かして貧しい国を改善するソーシャルビジネスの重要性を知ったので、いつか自分

でも挑戦してみたいと思います」と感想を語ってくれた。  
「二人の男子に授ける教育は、一人の人間を教育する。一人の女子に授ける教育は、未来の世代をも教育する」。20世紀初めのガーナの教育者ジェームズ・アグレイが語ったとされるこの言葉は、女性に対する教育の重要性だけでなく、女性が社会で担う使命をも象徴している。得た知識を自分一人だけでなく、家族や社会のためにも生かし、導いていく——このメッセージに感銘を受けた丸王先生は、ジェンダー教育に力を入れている。

自ら意見を発信し、社会をリードできる女性を育てるために、授業の中で毎年行っているのが、「赤ちゃんポスト」の設置は認可されるべきか」というテーマのディベートだ。子どもの権利と女性支援という二つの考えを軸に、幅広い視点から意見をまとめて議論する。ディベートなので、自分の意見と反対の考え方も理解しなければならぬのがポイントだ。このディベートの決勝戦は毎年、文化祭を舞台に行われており、生徒たちにとっては人前で自分の考えを話す練習にもなっている。

また、生徒たちは短期海外留学で姉妹校の一つ、ノートルダムサンノゼハイスクール（米カリフォルニア州）のジェンダー学習に参加したり、ハワイ大学やハワイの高校を訪問してプレゼンテーションを行ったりするなど、自ら世界に飛び



「赤ちゃんポストは是非か」。一筋縄では答えが出ない問題を、生徒たちは全力で議論する

込み、多様性の大切さを身をもって体験している。  
「一人一人が違って当たり前だということ考えが浸透すれば、今よりもっと生きやすい社会になると思うのです。教師として、教育を通じて次の世代を育てていきたいと思えます」と話す丸王先生。違いがあるという事実を社会に浸透させるためには、それについて発信する人が必要だ。同校では昨年、校内での探究学習発表会を始めた。今年は、スーパーグローバルハイスクール（SGH）の生徒たちによる課題研究発表会、SGH甲子園への参加を目指しているという。持続可能な社会作りに必要な条件の一つ、ジェンダーの平等の実現に向けて、学校ぐるみで取り組みが進んでいる。



女性と社会が抱える課題とは何か、改めて考え直すことで、気付くことは多い



映画やドラマ、CMなどを題材に女性について考える「女性とメディア」も、生徒たちには人気のテーマだ